　　　　　　　　　　　　　翻訳論シケプリ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　文責　熊倉

★板書の少なさに定評のあるエリスさんです。

至らない部分も多いと思いますので、注釈やツッコみを入れつつ読んでいただければ幸い。

*§古典詩歌§*

○古池や　かはづ飛び込む　水の音（芭蕉）

　　　かはづ→一匹？

　　　水の音→ポトン、ポシャン…とにかく静かな音？

　のように、日本人が読むとある程度共通のイメージが浮かぶ

　BUT！！！英訳を見ると様々な解釈がなされている【プリント参照】

○お前百まで　わしゃ九十九まで　ともに白髪が生えるまで（都々逸）

　→「お前」「わしゃ」の口調から庶民の歌であり、また二人は親密であると感じられる

　BUT！！！英訳すると「You」「I」となって関係が分からなくなる

　　　　　You till a hundred years,　　　　　　　　　↓

　　　　　I till nine and ninety.　　　　　　　　　　　↓

　　　　　Together we still shall be,→「ともに白髪が生えるまで」どうなのかを

　　　　　In the time hair turns white.　　　　　　　　　示さなければならない

○春雨や　小磯の小貝　濡るるほど（蕪村）

○海暮れて鴨の声ほのかに白し（芭蕉）【プリント参照】

情景や音などは歌にはっきり示されていないにも関わらず、私たちが読むとある程度同じイメージが浮かぶ。何故？

　→Connotation（共示義）の存在！！

　　　(ex)春雨→細かい雨　　鴨の声、白→寂しい　　五月雨→早い、強い…など

21回の勅撰和歌集のプロセスの中でConnotationが決められていく

　→その後、俳句でConnotationがルール化、イメージを上手く掴めない庶民にも伝わるよう季語として一般化された

　→それが現代にも残っているというわけ

そもそも翻訳とは何か？

　→政治的力関係と密接に関連

　　他の文化圏から何か”学びたい”ときに行われる　（※詳細は近代文学の章にて）

　　BUT！！！同等の量が相互の文化で翻訳されるのはまれ

　→英訳すると解釈がかなり異なったり、イメージが違って見えたりする　【プリント（行く春や

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　…）参照】

○菜の花や　月は東に　日は西に（蕪村）【プリント参照】

　　英語の詩と俳句とでは求められるものが違う

　　　　英詩→長さ、要素

　　　　俳句→17字で伝わる広がり

　　英詩であれば菜の花の美しさを強調したり「私」の要素も入るはず

　　原文では時の流れが逆転したような、止まったような、不思議な感覚である

「風景（純銀もざいく）」（山村暮鳥）のような視覚詩・絵画詩など、全く新しいものも生まれる

*§近代文学§*

○思い出す夜は　枕と語ろ　まくら物いへ　こがるるに　【プリント参照】

　　George　Bonneau：日本研究者→原文ママを目指す

　　Paul Claudel：フランス詩人→フランス的、情熱的　　ジュレームジュレーム(´ω｀\*)

他文化が流入し、自国の文化が変容していく時、翻訳もまた盛んになる（但し文化間でほぼ一方的）

日本では明治が代表的　全く異質の言語を取り入れた重要な転換期

西洋近代化が目標　国家事業として行われた

《日本の思想に影響を与えた三書》【プリント参照】

　『西洋事情』（福沢諭吉）→経済　　『與地志略』（内田正雄）→地理

　『西国立志編』（中村正直）→精神

　西欧と共通する概念がないため、多くの新造語が誕生した

○自由　（『西洋事情』）

　freedom,liberty→「自主」「自主任意」

　　　　　　　　　「我儘放蕩にて国法をも恐れずとの意に非らず。総て其国に居り人と交て気兼

　　　　　　　　　　ね遠慮なく自力丈け存分のことをなすべしとの趣意なり」

　　　　　　　　　　BUT「未だ的当の語字あらず」（概念が無かった）

　　『自由之理』（中村正直）で「自由」の語が定着

　　なおこの本ではsociety「すなわち政府のこと」とあり、政府と社会の区別がなされていない

○権利

　right→「正理に従て人間の職分を勤め邪悪なきの趣意なり」（『西洋事情二編』）

　　　　　「万国互二相対シトル事ヲ得ルノ権ト務メサル事ヲ得サルノ義トヲ論スル者ナリ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　powerの意　　　　　　　　（西周『万国公法』）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　↓

　　　　　　　　　　　民権…「民に権があると云ふのは、何の事だ」と反発を招く

BUT！「right、freedom、libertyなどの言葉は日本語ではたいそう弱弱しくしか表現することが

　　　　できない」（by内村鑑三『萬朝報』）

○自己　【プリント参照】

　　日本にはキリスト教の"個人"（individual）の概念が無かった→自立が大事

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」）

　　国力充実のためには自主自立の個人を作らねばならない

　　identitｙは翻訳されず

《「落葉」（ヴェルレーヌ・仏）》……ジャンルを超えて訳された　　【プリント参照】

　↑　上田敏『海潮音』より

　｜　秋の感覚が日本の感覚と通じた＋上田敏の翻訳の巧みさ（伝統ある言葉を使いながら新しい

　｜　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　詩を表現）

　↓

《二葉亭四迷》……異質性を損なわないように訳す　（参考：柄谷行人のエッセイ）

　　原作の意味を巧みに伝える創造的な翻訳の仕方を否定

　　文学に対する尊敬の念が強かったので…（中略）一字一句と雖も、大切にせねばならぬとや

　　うに信じた」

　　→故に「須らく原文の音調を呑み込んで、それを移す」という逐語訳を試みる

　　意味に囚われない言語的な形式そのもの（純粋言語）を、逐語訳することで日本語において救

　　済しようとした

　　ルターの聖書の翻訳がドイツ語を形成したように、四迷の逐語訳は新たな表現の道を拓いて時

　　代に影響を与えた

○秋＝淋しい、というConnotationは新古今和歌集でピーク　【プリント参照】

　　 (ex)三夕　心なき身にもあはれは知られけり　鴫立つ沢の秋の夕暮（西行）

　　　　　　　さびしさは其の色としもなかりけり　真木立つ山の秋の夕暮（寂蓮）

　　　　　　　み渡せば花ももみぢもなかりけり　浦の苫屋の秋の夕ぐれ（藤原定家）

　　　　　→もはや秋は淋しいものというのは自明であり、わざわざ歌に出すのは野暮であった

　では、英訳されたときどれだけその淋しさが伝わるか？

　　《ボードレールの詩》

　　　　秋が淋しいのは北半球では比較的共通

　　　　BUT！！感じ方は異なる（日本→しみじみ　フランス→激しい）

✜俳句が外国に輸入されたとき何が起こるか？✜

○釣鐘にとまりてねむるこてふ哉

　→朝方の寺の釣り鐘に蝶がいるイメージ

　　　釣鐘：静止、重い、黒っぽい⇔蝶：軽い、明るい

　《英訳ver.》

　　・釣鐘ではなく大砲の砲口にとまっている→平和の象徴　　※背景は1919年（WW㈵後）

* 蝶が羽ばたいている

・蝶に色がある

【プリント参照】　「菜の花や〜」の歌をワーズワース風に英訳したもの

　　　　　　　　　　韻や長さ、風景の美しさの強調など、英詩のスタイルに則っている

○Imagism：和歌が外国に輸入されて起こった自由詩運動

　　　　　　 落花枝にかへると見れば胡蝶かな」（荒木田守武）が発端

　　　　　　　→落ちていく花と蝶のイメージを重ねる斬新さが衝撃的

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　↓

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　Superposition（重置法）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(ex)In a Station at the Metroの詩

　　日本に逆輸入……「てふてふが一匹　韃靼海峡を渡っていった。」（安西冬樹『春』）

✜日本の文学✜　【各自プリント参照】

○里見弴『椿』

　　背景：大正時代、関東大震災後

　　　　「三十を越して独身の女」の叔母と「二十歳の娘」である姪が、避難先の慣れない住居

　　　　　で暮らしている　（→陰鬱、文中の怖さ・不気味さの要因）

　　　　　椿が落ちたことをきっかけに、女盛りを過ぎた叔母とこれからである姪との魂の交わ

　　　　　りが始まる

　　　　　（椿…女性的な美しさの象徴）

　　　→英語になると時代独特の雰囲気が伝わってこなくなる

○夏目漱石『坊ちゃん』

　　左…1960年代　日本人の訳　文法重視でカタい

　　右…1980年代　アメリカ人の訳　リズム重視でくだけた英語

○川端康成『雪国』『千羽鶴』

　なぜ川端作品は訳し難いのか？

　（１）日本の「小説」と西欧の「Novel」の違い

　　　　Novelの前提……起承転結が明確な構成、深みのある登場人物、ある程度の長さ

　　　　　　↑　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（歴史的背景含む）

　　　　　　↓

　　　　小説……何でもアリ

　　→最もNovelの規則から外れているのが川端作品

　　　例えば『雪国』はあちこちの雑誌に送った短編をまとめて長編にしたもので、もともとオチ

　　　を考えて書いたわけではない

　　　　　→Novelへのアンチテーゼ

　（２）文化的コードに依存した情報

　　　「桃の花」→３月、「つつじのつぼみ」→４月下旬、「若葉」→５月……

　（３）表現の仕方そのものに含まれる情報……翻訳には含まれない

　　　　ちか子「油断がならないわ」「よく御覧なさい」→さばさば

　　　　太田夫人「そうじゃございませんのよ」→べたべた

　（１）〜（３）の要素が含まれるために川端作品は英訳しづらい！

○三島由紀夫『憂国』

　　まさにそのまま英語に訳すことができる

　　三島も英訳を意識して書いている

* 村上春樹『羊をめぐる冒険』

　これまでの日本文学と異なり、多くの言語で訳され、尚且つスピードも早い

　純文学とも大衆文学とも違う「中間文学」というジャンルを打ち立て、その研究は日本国内よ

　りも海外のほうが進んでいる……というのは置いといて

村上作品は何故そんなに読まれているのか？

　→文章の特徴

* 一文一文が短くリズムがあり、非常に読みやすい
* 数字が多用され描写が細かく、イメージが浮かびやすい
* 外来語が多く用いられている
* 比喩を始めとして何気ない部分での表現が一風変わっている

　　　　　　　　（「細かいちりのような沈黙」「必要以上にしんとしていた」など）

* Connotationがほとんど無く、そのまま英語に置き換え可能

ただし英訳すると四番目の要素は薄れる

（違和感もきちんと含めて訳す翻訳者もいるのだが反応はイマイチ）

　村上作品はどう読まれているか？

　　　欧米：西洋文学と同じになった！

　　　アジア：新しいものが入って来た！

　　→「皆が同じ感覚で読めるものができた」というのが共通の意見

　　BUT！！！村上作品に出てくる「都会の青年像」は特殊なタイプである（有徴性を持つ）

　　都会というコンテクストは同じでも、そこに含まれる各々のテクストは各国で意味が異なる

　　「同じ感覚」で読めると思ってしまうのは危険である

翻訳は異質性と異質性とのぶつかり合い。原文と一対一で訳せるからといって、同じ感覚を共有しているという幻想を抱いてはいけない。

以上、声にエロスを感じるエリスさんの翻訳論でした。